

沼津市 山 羽 水 記念館

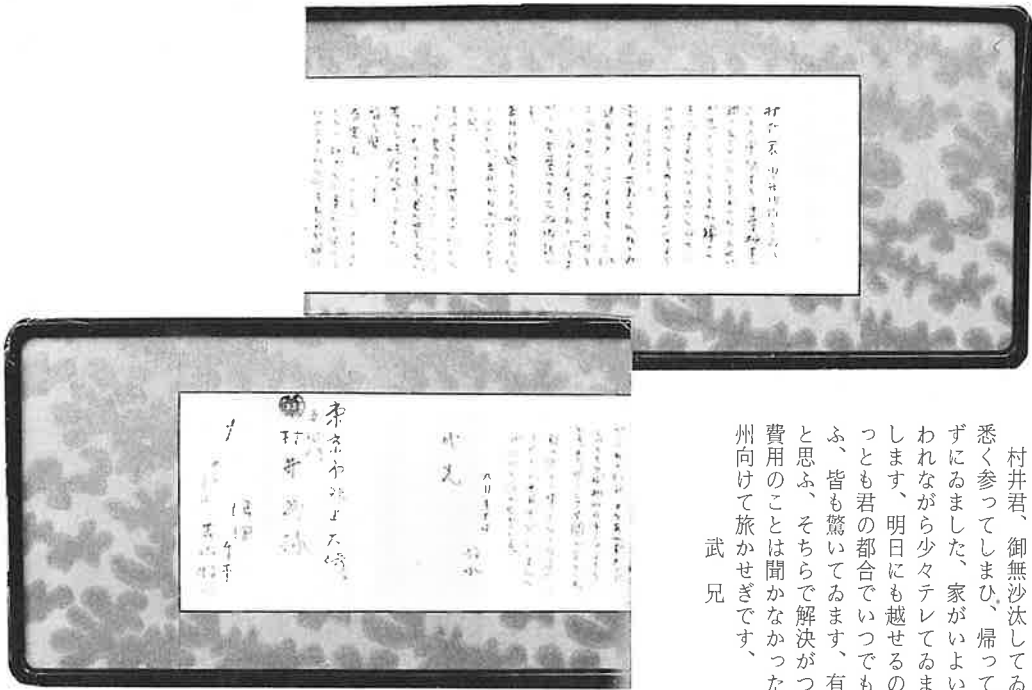
第7號

1991.9.1.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424



村井武宛書簡(展示中)

(東京 村井武宛 大正十四年九月三十日付 沼津千本より)

村井君、御無沙汰してゐて何とも申し訳なし、千葉栃木を廻つたのが暑いさかりだったせゐか、悉く参つてしまひ、帰つて来てまるでバカになつてねていたのだつた、それこそ字一文字ようかゝずにゐました、家がよいよ出来上がった、たまた建具が入つてみるとても立派なものになり、われながら少々テレてゐます、全くおかげさまでした、言葉につくせぬ御礼です、五日に引つ越します、明日にも越せるのだが、五日が日がいいのださうだ、それまでに来て貰へるか知ら、もつとも君の都合でいつでもいゝが、とにかく来て貰ひたい、君にも屹度気に入るとおもふ、皆も驚いてゐます、有光君のことで君にも気をもませたが、何か云ひ違ひか聞き違ひのことと思ふ、そちらで解決がついたか知ら、とりあへずメンドジツクヒをば西川の手でやるさうです、費用のことは聞かなかつた、引つ越してゆつくりしたいがさうもゆかず、十月中旬ころ、また九州向けて旅かせぎです、

武 兄

九月三十日

牧水

村井武は建築技師として当時東京に暮らしていた。この人は牧水にとつてはおさななじみ、延岡の高等小学校からの友人で、互いに「武ちゃん」「繁ちゃん」と呼び合つた最も古い仲間の一人である。牧水の初めての県外旅行となつた明治三十一年の母や義兄との金比羅参りは、この「武ちゃん」のバックアップによつて実現したと伝えられる。延岡中学時代も同期で、文芸研究の回覧雑誌「曙」を編集した当時は、牧水が雨山、村井は柳雨という雅号を用いて参加している。延岡中学を卒業すると二人とも東京へ出て、牧水は早稲田大学予科に行き、村井は蔵前高工へ入学した。

牧水が沼津永住を決意し、住宅を新築しようと本気で考えるようになったのは、雑誌「創作」が軌道に乗り始めた大正十一年頃かと思われる。翌年になつて村井との交信が始まり、その後かなり頻繁になる。手紙の中で牧水はしきりに「自分たちの巣であり、勉強道場であり事務室である住宅の必要」を説き、また、自分で書いた「夢想の家屋」という設計資料などを送る。村井も友人の意を汲んで、まもなく正式の設計図を作り、沼津へもしばしば訪れている。この手紙は住宅竣工の報告をかねた御礼のための誘いである。家は沼津市市道に購入した五百坪の土地に、「夢想の家屋」そのままの二階二室下九室、建坪七十九坪の広さを持つ、間取りも環境も理想的なつくりであった。その喜びは格別なのだが、この手紙にもあるように、建築費用ねん出のための列島各地への苦しい「旅かせぎ」がすでに始まつていた。色紙半切など頒布のための、牧水を最も苦しめた揮毫旅行と呼ぶ難行である。

(上田 治史)

第一回「市内中学生等の短歌募集」 入選作品 (平成二年九月)

特選 (十一首・十人)

雨あとのぬけるような青色にコスモスの花やさしく
ゆれる
カレンダ―八月の紙破る俺十五の夏が思い出となる
愛鷹中 小沢 智子

芝刈りて背伸びをしつつ仰ぎ見る空にぽっかり白き
わた雲
静浦中 小早川雅敏

泳ぎたい泳ぎたいけど泳げない中三の夏はクーラー
の中
暑い日に飛んで走って汗まみれつかれるけれど楽し
い部活
片浜中 丸勢 玲子

野ら道に群れ飛ぶとんぼ自転車でつっきるとききの気
分さわやか
片浜中 星野 英史

いつの日も大事にしたい我が心素直になれたら最高
なのに
愛鷹中 渡辺奈津子

夕焼けはきんもくせいに語りかけ光とともにしずま
りかえる
愛鷹中 萩原 由紀

湖で子魚の群れ追いかけてびしょぬれになる夏の日
の午後
片浜中 星野 英史

山道を毎朝登る私たちあとわずかな日ゆつくり登る
静浦中 久保田由香

暗い夜きれいに光るまるい月塾の帰りの心あたたむ
片浜中 高木 弓穂

入選 (三十首・三十人)

スピードをますますあげて雲は行く関東平野海のよ
うな空
五中 石川 織絵

せみの声耳のどこかでなりひびく夏も終わりだそう
さげんでいる
五中 戸枝裕美子

あまがえる雨の降る日は飛び起きて雨がやむまで大
合唱
片浜中 増山 陽子

われ思ふやりたいことは多けれどやること多し三年
の夏
片浜中 斉藤 孝之

足もとにひらりと枯葉落ちてきて夏風景に秋が近づ
く
片浜中 舛谷 努

夏休み発明工夫感想文残暑の暑さに紙べたべた
片浜中 神戸 智代

友達と慣れぬ着物にげたはいて夏の夜空に見る花火
かな
片浜中 木村 由加

水たまり指をそおとと触れたらばこだまのように輪
を浮かべた
片浜中 大川 知子

せみの声たきのしぶきにかき消され暑さ忘れて憩う
ひととき
片浜中 海福江利子

川の水避暑地でさわる感触は氷のように冷めたかつ
たな
片浜中 厚見しのぶ

夏の朝日はたかだかと部屋にさす遅き目ざめに休み
の実感
片浜中 長浜 陽一

あの人のどんなところが好きなのかやさしいところがす
てきなかも
静浦中 加藤 彩子

あすなるか？ いやちがうかも今、私いつかなりたい
大きなひのきに
静浦中 大木 康江

いさりびの水平線にきらめくを鈴虫のなく浜辺より
見る
静浦中 川口 尚子

夏の夜ひととき目立つさそり座と光り輝くおとめ座
スピカ
静浦中 久保田智子

来年の花開くまでただじつとつぼみになるこの時
を今
静浦中 大木久美子

暑い中僕は受験で家の中いつもとちがう休みをすご
す
静浦中 伊藤 優子

あおあおと生気に満ちた草や木が炎のようにもえさ
かりだす
静浦中 遠藤 龍治

草かりの目先に止まる赤とんぼ真つ赤な背中に気付
く秋かな
静浦中 深澤 久美

暑い朝蟬たちのうた広がればもう八時すぎととび起
きる
門池中 菅沼 夕

いつの日か思い出す日が来るだろうもどりたくなる
今のこの時
愛鷹中 武藤由紀子

友だちと並んで歩く帰り道とんぼが空を駆けぬけて
いく
愛鷹中 小林 早苗

白い雲いつもふわふわ宙にうきまもちよさそう空い
っぱいに
愛鷹中 向坂 吏香

夏の陽は麦わらぼうしふきとばし波とともに遠ざか
りけり
愛鷹中 大嶋喜美子

我が夢はいくらおつてもおいつかずあなたは何を追
っているのか
愛鷹中 幸崎 佑美

十四の今しかできないことだからすなおになりたい
自分の気持ちに
愛鷹中 山口 宏美

静浦中 坂倉真由子

群馬県沼田猿ヶ京の

牧水文学碑



沼田市から水上へむけて五キロほど走ると、月夜野町に出る。そこから三国街道（国道十七号）を十二キロも走るだろうか、塩原太助生家という旧家を右に見て赤谷川沿いに上ると、牧水が泊まった湯宿温泉を経てやがて赤谷人造湖が見えて来る。群馬県利根郡新治村猿ヶ京はこの人造湖のほとりに温泉街を広げて居る。湖に沿って進むと信号機のある交差点の角に、旧三国街道の関所跡がある。越後と関東をつなぐ三国街道が江戸時代に五街道に次ぐ街道と

して重要視した証拠でもあろう。この関所跡を山側に曲がると猿ヶ京の町内に入る。道なりに進むと右手に猿ヶ京ホテルの案内板が目につく。街道沿いからも入れるようだが、文学碑はこの上の道からの玄関口にある。「みなかみ」と題して、みなかみ紀行の冒頭の『私は河の水上といふものに不思議な愛着を感じる癖を持つてゐる。一つの流れに沿うて次第にそのつめまで登る。そして峠を越せば其処もまた一つの新しい水源があつて小さな瀬を作りながら流れ出してゐる、といふ風な処にであふと、胸の苦しくなる様な欲びを覚えるのが常であつた。』が旅人先生の筆で刻まれている。撰文は清水蓼人氏。建立は平成元年十月二十二日（実際には二十一日）。建碑はホテルの経営者持谷順一郎氏。ちなみに夫人の持谷靖子氏はたいへんな牧水の信奉者で、ホテルの併設する三国路紀行文学館の館長を務め、先般来沼されて沼津牧水会の会員にもなつてくださつてゐる。



この三国路紀行文学館は土蔵風の建物に三国街道に纏わる文学の種々を収めた見頃の文学館で、特にビデオの資料が充実していて感心させられた。民話の収集にも大変関心が高いという話で、語りべの語りをもそのままビデオに収録、来館者が自由に聞けるようになっていゝところが楽しい。その文学館からすぐ近く、水管橋で溪谷を越えたところに石碑の道と称する遊歩道があり、その入口に野竹雨城の句碑「落葉焚く大嶺を盾の幾風雨」と並んで、もう一つ牧水の文学碑がある。これもホテルの建立によるもので昭和五九年の秋に建てられたと言う。碑文は、やはり「みなかみ紀行」の中の法師温泉へ辿る部分で「さらにまた読者よ、その少し手前、沼田の方角に近い処に視線を落して来るならば」に続く一文、『其処に猿ヶ京村といふ不思議な名の部落のあるのを見るであらう。』を刻む自然石で、大正十一年十月三日、牧水みなかみ紀行より、と付記されている。帰途、暮坂峠に回つたが暮坂峠を草津よりに越えた六合村の須川沿いの小さな砂防ダムの降り口に掲示板様の木の作り物がありそれに、牧水の歌が書かれていたのが、何とも微笑ましい風景であつた。

(須永)



第三十八回 沼津牧水祭

短歌大会

日 時 平成三年十月六日(日)
場 所 沼津市常盤町自治会館ホール
講 師 春日井 建先生
賞 沼津牧水賞、市長賞、教育長賞、他

碑前祭・芝酒盛

日 時 平成三年十月二十日(日)
場 所 千本松原若山牧水歌碑前広場
無 料

平成三年度 音楽イベント紹介

〈牧水記念館ラウンジ〉

六月八日(土) 六時三十分

「ヴァイオリンとチェロのための二重奏」
出 演 花崎 淳生・花崎 薫

八月八日(水) 七時

「ジャズヴォーカルナイト」
出 演 室 伏 裕 子

八月二十八日(水) 七時

「馬場主翁ピアノコンサート」
出 演 馬 場 主 翁

九月七日(土) 六時三十分

「ファンタスティック ハーモニカ」
出 演 崎 元 讓・松井 久子

十二月十五日(日) 五時三十分

「ギターソロコンサート」
出 演 福 田 進 一

中学生の短歌作品募集中

応募締切 九月三十日



バイオリン・チェロコンサート (6/8)

編集後記

中学生の短歌は、昨年度、平成二年九月に行われた募集作品です。発表が遅きに失した感がありますが、その間、牧水記念館館長大悟法利雄氏の死去、若山旅人氏の新館長就任と記事の組み替えが続き、ここまで伸びてしまったことをお詫びいたします。この九月には第二回のコンクールが計画されていますので、いい機会かと思ひ、ここに掲載する次第です。
(須永)



第37回 碑前祭・芝酒盛